

第18回 許我篆書展出品者目録 (敬称略・五十音順)

テーマ「^{ふるさと}故郷」「古里」「古郷」 ※漢字は自由選択

作家名	作品イメージ
あかひら たいしょ 赤平 泰処	「故郷」を篆書で制作するには少し気持ちに隔たりがあり苦勞した。造形と筆法に拘りながらまとめた。
ありおか しゅんがい 有岡 鄒崖	西周金文の字画に則り、疎密感を出す為、上の字は字画の少ない「古」字を用いた。線は平易な線を用いて落ち着きある作となるようにした。
い が き せいめい 井垣 清明	私には ^{ふるさと} 故郷がない。生地は足立区だが長野県に疎開し、実家は無い。物心ついた時から板橋区に居る。詩や歌の故郷に夢を追う。兎追いしかの山(童謡)、夕空晴れて秋空吹き(故郷の空)。ふるさとの山に向ひて(啄木)、ふるさとは遠きにありて(犀星)。ふるさとの訛なつかし(啄木)。スワニー川。等々……
いしかわ せいきゆう 石川 青邱	印篆を素材に二字の様式を整えることで、まとまりを重視しました。字の中に若干の潤渴をつけ、単調さを避けたつもりです。
いしざか まさひこ 石坂 雅彦	西周前期の金文を用いて書いてみた。古代感の中に現代的な活き活きとした息吹きを求めてみたが、新しさはなかなか難しい。人間が古くなったからなのか？
いのうえ しゅうか 井上 秀花	幼い頃から父の仕事の関係で北や南へと移動があり、私には宮崎県が一番明るく優しく楽しかった思い出につながる「故郷」かと。その優しさ明るさが線に表現できたと思っていますが……。
い ば えいはく 伊場 英白	古郷は懐かしい思い出の場所、心優しい温かさを表現したかった。
いわた めいりん 岩田 明倫	右手での表現合理を主にし、線の働きがそれぞれの意を含み、展開され文字として又、表現面積の余白が空間となり、作品として成立を心掛け制作。
うしくぼ ごじゅう 牛窪 梧十	私が生まれたのは武蔵野の一角。雑木林と畑が続くところで、畑の先の遠くにみえる富士山が印象的であった。 武蔵野の富士は低しと菜花伸ぶ
おおいし りくでん 大石 六田	郷を離れて既に五十余年、時折帰郷する。深夜静寂、安康の数日を過し元気になって帰京する。その後、暫くはつい童謡「 ^{ふるさと} 故郷」を口遊みたくなる。今回は、その歌詞を五言四句に改め、課題の一つ「古里」に書き添えた。

作家名	作品イメージ
おおはし ひろゆき 大橋 洋之	篆書金文の持つ曲線の表現効果を最大限生かしてみた。一本一本の線の役割と存在感。 生命力が宿る作品制作を目指した。
おおやま くはち 大山 九八	書も印刻も引き算・再現の芸術。究極は「構成のセンスとスピード感潜む線質」。その上、「あそび、こなれ、みだれ」のプラスアルファ。一回勝負のアヤの中で、どれだけ自然に生かせるかが勝負の分岐点のようだ……。
おかのや こういち 岡野屋 宏一	ひとそれぞれの心のふるさと。その想いをのせて。
かわち くんぺい 河内 君平	故字は、小篆では𠄎に作り、象嵌金文《中山王 𠄎方壺（戦国晩期）》では故＝旂として𠄎に作ります。郷字は、甲骨文字では𠄎に作り、金文《伯者父簋（西周早期）》では𠄎に作ります。字形と筆法の統一を図って書いてみました。
こはら どうじょう 小原 道城	昨今、中国の齊白石の書画を研修しています。水墨画にすっかり共鳴し個展でも水墨画作品も増やして白石の臨画も楽しんでいます。この故郷の二文字は白石の作品中の字体です。沈んだ深い線條を再現したかったです。
さとう ようさい 佐藤 容齋	「ふるさと」と言えば、それぞれの懐しい郷土料理とおふくろの味が思い起こされます。あえて淡墨を用いることで料理を囲んで会食する温かさやかさを表現してみました。
すずき きょうせん 鈴木 響泉	潤渇・太細・疎密の調和を求めた。
たかいち けんがい 高市 軋外	作品にするとき、語意文意にはあまり左右されず、古典や憧憬の先達の書を意識下に置きますが、今回はしばらく帰っていない故郷を懐いつつ……。ありがとうございました。
たぐち ぎしやう 田口 巍嶂	今回は、「その先にあるもの」を目指してやってみた。故郷を思う気持ち——。若い頃には感じなかったものを篆書の文字に託して、現代の風を取り入れつつ、どこか懐かしさをみつめて……。響きわたる作品を。
たけなか せいこ 竹中 青琥	故郷は？ 現実界と魂のふるさと、いずれにしても、穏やかで、争いのない人々との交流の出来るところ、ということで、ノンビリしてゆったりした作品を心がけました。文字の形は古代の甲骨文にて。
たねや ばんじょう 種谷 萬城	災害や戦禍で故郷を失った人々に心が痛みます。生まれ育った地には、変わらぬものと変わりゆくものがあります。その移りゆく様を曲直、太細、潤渇等の線の表現と、字形を左右非対称にした金文で表現してみました。
つのだ たいじょう 角田 大壤	金文での表現を試みた。寸法、選文の選択が出来ない中での制作のため、かなり限られた状態ではあるが、可能な範囲でどうにか収めた、というのが正直なところです。

作家名

作品イメージ

とび た ちゅうこう
飛田 冲曠

印章で、大らかな空間と緻密な動きを心掛け、単調にならないように表現してみました。

ひ が の たく
日賀野 琢

戦国期の竹簡等に見られる篆書の速書省略体を試みました。誰の心にもある「故郷」へのノスタルジアを想い、温かみのある雰囲気演出したつもりです。

ひろは た ちくしゅう
廣畑 筑州

金文で制作しました。
特にこれといったものはありませんが、線の充実感には少し配慮しました。

まつぎ き れ ぶん
松崎 礼文

親元を離れて、学生生活を四年間過ごした新潟は第二の故郷。書を志す仲間達と出逢い、苦楽を共にした大切な場所。書を学んだ原点と言える。その新潟に想いを馳せて……。

みやおい ちようこう
宮負 丁香

帛書文字を使用して柔毛を使い仕上げました

やなぎ へきせん
柳 碧蘚

円と直線、そして方の融合を試みた。
また情感を醸す為、淡墨とした。

やまなか すいこく
山中 翠谷

篆書の完成形は、等速等圧の線で、均整の取れた書きぶりであるが、私は「古郷」に対して「素樸・温もり・あどけなさ・親しみ」等を感じ、それをイメージして、少々、形を「いびつ」して書きました。

よしの たいきょ
吉野 大巨

甲骨文は丁錢塘の商卜文集聯を。金文は呉大澂の篆文孝經論語を。小篆体は呉昌碩の西泠印社記を勉強の中心に置き、繰り返し鍛練しています。篆刻の秦漢印・博文瓦當文を線的・造形的に、毛筆での表現と考え、只々無限で悠遠な美の世界に迷い込み、楽しんでいる自分が、そこに在ります。

わたなべ れい
渡邊 麗

故郷、こころの拠りどころ、心の帰る場所。子供の心にもどる時、自然と笑みが浮かんでくる。生きていく過程の中で原点と言える様な、いつまでも有り続けるふるさと。懐かしくて安心できる、自分を包み込んでくれる原風景があるならば、希望の道が見えてくる。

篆刻美術館

会期：令和7年 4月26日(土) ～ 6月24日(火)

令和7年度テーマ

ふるさと 『故郷』について



2024.8.14 古河歴史博物館
「夢あんどんと夕涼み」

古河公方公園
「古河桃まつり」

■合併20周年を迎えた「古河市」

許我篆書展では毎年、古河市にゆかりの深い語句をテーマとしております。

第18回許我篆書展では合併20周年を記念し、「故郷」といたしました。

古河市は平成17年9月12日に3市町が合併し、令和7年度で20周年を迎えます。当時生まれた子たちも二十歳となり、彼らにとっては現在の「古河市」が「故郷」といえるでしょう。

誰しもの心に思い浮かべることのできる「故郷」をテーマに、先生方から玉作を賜りましたので、ぜひご観覧ください

篆刻美術館